

日本語教育の実践的研究 (Ⅲ)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/23472

日本語教育の実践的研究 (Ⅲ)

深井一郎 高見よ志子*
 夷藤保* 端名秀雄*

はじめに

昭和59年7月15日、「教科教育研究」第20号に載せた「日本語教育の実践的研究(Ⅱ)」につづくものであり、今回を以って、この共同研究は一応終了する。

前号において、これまでの概括を行っておいしたが、その中で、なお残された諸課題のうちで、この際、とりあげておくべき問題を、今回は「目標」に据えた。

約10年に及ぶこの共同研究についての総括的な検討は、次の機会にゆずることにする。

実践例① (1年の授業)

端名 秀雄

1 題材 方言(かたぐるま)

2 目標

- ・方言には地域によって、またその地域の中でも使う人の年代によって、同一事物の表

5 学習展開 (2次の1)

[別紙]

学 習 活 動	配時	予想される生徒の反応と教師の働きかけ
1 自分たちで調査した資料②から得られた言葉を発表する。	10	・「小さい子供などを首にまたがらせて高くさし上げることを何をするといいですか」の項目から得られた各世代の語形を発表させる。
2 資料①を見て気付いたことを発表する。	15	・全クラスから集めた資料の中から、上の項目で得られた語をまとめた表を提示し、表からどのようなことがいえるか考えさせる。 ・意見が出にくいようならば観点を与えてやる。

現のしかたに違いがあることを理解させる。

- ・「カタグルマ」という言葉が、自分たちの年代で広く使われるようになった背景について考えさせる。

3 指導の観点

かつては地域毎に、また同一地域内においてもそれを使う人の年代によっていろいろな表現をした事柄が、次第に地域や年代を問わず、共通語的な言葉で表現されるようになってきていることに気づかせる。

自分たちが調査した資料を分析させることにより、その事柄に対する関心を高め、普段何げなく使っているそれらの言葉についての認識を深めさせる。

4 指導計画

- (1) 1次 調査
- (2) 2次 調査資料の分析……………3時間

* 金沢大学教育学部附属中学校教授

<p>3 言語地図（資料③）によって日本各地の様子を知るとともに、「カタグルマ」という語について考える。</p>	<p>15</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・おもしろい言葉はないか。 ・関係をもっている言葉はないか。 ・各世代を比較してみるとどうか。 ・自分たちの世代で言葉の種類が少ないのはどうしてだろうか。 <p>・「かたぐるま」の言語地図を簡略化したものをOHPで提示し、かつて日本各地でどのような語形が用いられていたのかを知らせる。</p> <p>・全国的に見ると、地域によってまとまりがあることに気付くであろう。そこで、「カタグルマ」が関東周辺を中心としたごく一部の地域にしか見られないことに注目させ、それをどうして自分たちが今、多く用いるようになっているのかを考えさせる。</p> <p>・マスメディアが媒体となっているという答えが予想されるが、その他に教科書による影響についても少しふれてやってもよい。</p>
<p>4 本時のまとめをする。(ノート)</p>	<p>10</p>	<p>・学習してわかったことをノートにまとめさせ、何人かに発表させる。</p>

〔資料④〕

<p>のったか(富山) てんぐるま(群馬) がらんこ あんぼけ あばてんこ たんたき おとまはいこ おんぶかち かんまいだ ちよんこやつさ かたてんぼ たかいたかい かたおんぶ さいこおんぶ さるこおんぶ かたぼんぼ てんぐぼんぼ せいたかぼんぼ たかかぼんぼ たんちぼんぼ さるかぼんぼ さえこぼんぼ さるこぼんぼ かたぐるま さるこぼんぼ さるぼんぼ</p>	<p>(祖父 母) 小さい子供などを首にまたがらせて高くさし上げるといいますか。</p>
<p>おんまかち けんのり ばばたんこ あんまたんこ まっちゃんたけま(富山) てんぐ でんぐるま(富山) たかんま かたこま(大阪) かたうま ちよんのくび ちよんこやつさ たかいたかい たかたか かたぼんぼ さつかけぼんぼ さるかぼんぼ かたかぼんぼ たかかぼんぼ せいたかぼんぼ さいこおんぶ たかいたかい たかたか ちよんこやつさ</p>	<p>(父 母) かたぐるま さるこぼんぼ さいこぼんぼ さるかぼんぼ さつかけぼんぼ かたぼんぼ たかかぼんぼ せいたかぼんぼ さいこおんぶ たかいたかい たかたか ちよんこやつさ</p>
<p>おんまかち けんのり ばばたんこ あんまたんこ まっちゃんたけま(富山) てんぐ でんぐるま(富山) たかんま かたこま(大阪) かたうま ちよんのくび ちよんこやつさ たかいたかい たかたか かたぼんぼ さつかけぼんぼ さるかぼんぼ かたかぼんぼ たかかぼんぼ せいたかぼんぼ さいこおんぶ たかいたかい たかたか ちよんこやつさ</p>	<p>(自 分) かたぐるま さいこぼんぼ たかいたかい さいころおんぶ</p>

〔資料②〕

次のような物や事を何といいますか。

1年 組 番 [調査票例]

	祖 父	祖 母	父	母	自 分
生 年 月 日	④ T S 42.11.19	M S 2. 6.21	T S 14. 9.26	T S 20. 1.15	⑤46. 7. 3
年 齢	75歳	72歳	44歳	39歳	12歳
生まれた所	石川郡すが なみ町	宇ノ気町横 山	宇ノ気町横 山	そうしゅく 町	ひろおか町
3歳～15歳まで育った所	まっとう町 にししん町	横 山	広岡町	英 町	田上新町
現在以外で生活したことのある土地	にししん町 すがなみ町	やよい町 ひろおか町	な し	広岡町	な し
父母の出身地	父 母 すがなみ町	父 母 宇ノ気町	父 母 まっとう 母よこやま (うのけ)	父 母 金 沢 市	父 母 ひろおか 母英 町
あさっての次の日を何と言いますか。	しあさって	しあさって	しあさって	しあさって	しあさって
子指と中指の間の指を何指といいますか。	くすりゆび	くすりゆび	くすりゆび	くすりゆび	くすりゆび
まぶたにできる小さいできものを何と言いますか。	めもらい	めもらい	めもらい	ものもらい	めもらい
指にささった小さい木のくずなどを何と言いますか。	と げ	そげがたつ	と げ	と げ	と げ
冬のき下にぶら下がっている氷の柱を何と言いますか。	つらら	たるき	つらら	つらら	つらら
背中にからをせおって、雨のあとなどに葉っぱの上にいる虫を何と言いますか。	かたつむり	かたつむり	でんでん虫 かたつむり	かたつむり	かたつむり
足をくずした男の人のすわり方をなんと 言いますか。	あ ぐ ら	あ ぐ ら	あ ぐ ら	あ ぐ ら	あ ぐ ら
田んぼなどにいるカエルの卵からかえったばかりのものを何と言いますか。	おたまじゃくし	おたまじゃくし	おたまじゃくし	おたまじゃくし	おたまじゃくし
女の子がほり上げて遊ぶもので、小さい布のふくろの中に石や豆などをつめたものを何と言いますか。	たまこ	たまこ	おじゃみ	おじゃみ	おてだま
小さい子供などを首にまたがらせて高くさし上げることを何をするといいますか	せいこぼんぼ	かたぼんぼ	せいこぼんぼ	さいこぼんぼ	かたぐるま
前足にぎざぎざのある黄みどり色の虫を何と言いますか。	かまきり	かまきり	かまきり	かまきり	かまきり
ゆでたりにたりして食べる丸いものです。何と言いますか。	じゃがいも	じゃがいも	じゃがいも	じゃがいも	じゃがいも
ゆでたりやいたりして食べる黄色いつぶがたくさんある細長いものです。何と言いますか。	とうもろこし	とうもろこし	とうもろこし	とうもろこし	とうもろこし
砂糖の味をどう言いますか。	あ ま い	あ ま い	あ ま い	あ ま い	あ ま い
塩の味をどう言いますか。	く ど い	く ど い	しょくどい	しょっぱい	しょっぱい
塩味の足りない味をどう言いますか。	しょうもない	しょんない	しょうもない	しょうもない	しょうもない
大きな犬が何四もほえかかっていまにもかみつきそうになる。そんなときの感じをどんなだと言いますか。	おそろしい	おそろしい	おそろしい	こわい	こわい
梅干しの味をどう言いますか。	すっぱい	すっぱい	う ま い	すっぱい	すっぱい
暗い所から急に明るい所へ出たり、太陽をまともに見たときの感じを何と言いますか。	まぶしい	ばばやすい	まぶしい	まぶしい	まぶしい

6 学習記録

- T₁: 「小さい子供などを首の上にまたがらせて高くさし上げることを何をするといいですか」の項目について、みんなが家で調べてきたものを発表してください。
- P₁: 祖父母が「かたてんぼ」で、父が「かたぼんぼ」で、あとは「かたぐるま」です。
- P₂: 祖母と父が「ちんかけ」で、あとは「かたぐるま」です。
- P₃: 祖父母が「かんまいだ」で、あとは「かたぐるま」です。
(発表が続くが略)
- T₂: では、次の他のクラスの分もまとめて表にしたものを見てもらいます。
(資料①配布)
- この表を見て、何か気の付いたことはありませんか。
- P₄: 「ぼんぼ」とつく言葉が多い。
- T₃: 「ぼんぼ」って何のことだろう。
- P₅: 「くるま」のことだと思います。
- P₆: 「おんぶ」のことだと思います。
- P₇: 私も今と同じ意見で、「ぼんぼ」というのは「おんぶ」のなまった言葉だと思います。それは、二つを並べてみると「ん」というところが同じで、大体似ているからです。
- P₈: 僕も「おんぶ」だと思います。わけは、おばあちゃんが赤ちゃんを抱くときに「ぼんぼ」という言い方を使うからです。
- T₄: 「おんぶ」と考えていいかもしれないね。他に何かありませんか。
- P₉: 全体的に「さる」という言葉が付いたものや、「さる」に似た発音をするのがたくさんあります。
- P₁₀: 「さる」の付いているのは、必ずどこかに「カ」行の音が入っています。たとえば、「さるこぼんぼ」の「こ」、「さいこぼんぼ」の「こ」、「さっかけ」も「か」があります。
- T₅: そうだね。ひょっとしたら「こ」が「か」に変化したりしたのかもしれないね。
- P₁₁: 「さる」とか、「さる」に似た言葉がつくのは、必ず最後に「ぼんぼ」とか「おんぶ」が付いています。
- P₁₂: 全体的に見てみると、祖父母にいろいろな言い方が多いです。
- P₁₃: 祖父母のところにはいろいろな種類の言い方があるんだけど、父母のところでは少なくなって、自分のところにはほとんど種類がなくなっています。
- T₆: たしかに自分たちのところが一番少なくなっているんだけど、どうしてだろう。
- P₁₄: おじいさんやおばあさんの時代には、いろいろな方言が使われていて、言葉の種類が多かったんだけど、僕たちの時代になるとほとんど標準語で話されるようになって、昔使っていた方言などがなくなっていったからだと思います。
- P₁₅: 似ているんだけど、おじいさん、おばあさんの頃だったら、あまりいろんな土地に行くことがなくて、その土地だけの方言などができたんだけど、今だったらいろんな所に行くことができるので、標準語などが使われるようになって、方言が使われることがなくなったんだと思います。
- P₁₆: おじいちゃんとかおばあちゃんは、昔に生まれたから、いろいろな所に行って言葉を聞いているので、たくさん知っているんだと思います。
- T₇: さっきの意見とは少し違って、昔もいろいろと行き来していたということかな。
- P₁₇: 僕は、おじいちゃん、おばあちゃんの場合は、ふだんから村に定住していた方が多かったと思います。
- P₁₈: P₁₆に付け足しなんだけど、昔は地域の交流が少なかったんだけど、多少はあったと思うから、言葉がまざりあってその中間みたいな方言ができてきたんだと思います。
- P₁₉: 今ではテレビとかラジオが発達しているから標準語というのが全般的に使われるようになったけど、昔はそういうものがなかったから情報の交換があまり行われていなかったから、方言がたくさんできたんだと思います。

P₂₀ テレビとかラジオが発達したから、国じゅうの人が使う決められた標準語ができて、それで少なくなっていくんだと思います。

T₈ じゃあ、一体標準語ってどんな言葉。

P₂₁ 方言じゃなくって、石川県の人が東京へ行っても使えるっていうか、全国的に使えるような、みんなが知っている、よく知っている言葉だと思います。

P₂₂ 一国の標準として認められている全国共通の言語です。(辞書を引ながら)

P₂₃ 標準語というのは、東京の一種の方言であって、東京が日本の首都だから標準語になっているんだと思います。

P₂₄ やっぱり、東京弁っていうのもあるし、それは違うと思います。

P₂₅ 賛成。(教人から)

P₂₆ 僕は標準語というのは、方言みたいになまりのない言葉を言うんだと思います。

P₂₇ 標準語って書いてあるのであたりまえなんだけれど、その国の標準となる言葉で、正しい手本となる言葉です。(辞書を見て)

P₂₈ 地域で使う言葉を方言とすれば、全国で使うのが標準語だと思います。

T₉ 手本であるとか、よくわかる言葉って言ったけど、じゃあ、どうして「かたぐるま」って言葉がその標準語みたいなものになったのかな。だれかが作ったり決めたりしたのかな。

P₂₉ もし、ある地域の方言を標準語としたならその地域だけを宣伝しているようになるので、それを防ぐために標準語を作ったんだと思います。

T₁₀ だれかが作ったものなの。

P₃₀ わからない。(口々に)

T₁₁ みんな今、「かたぐるま」って言い方をなにげなく使っているね。では、もう少しさかのぼって、明治二十年以前に生まれた人たちはどういう言い方をしていたか、全国的に見てみよう。(資料③をOHPで提示)

「かたぐるま」って言い方があるかな。

P₃₁ 地図から見ると、関東で「かたぐるま」

というのが多いので、やっぱり関東の言葉を標準語にしたんだと思います。

P₃₂ 「かたぐるま」は関東周辺に多くて、「さるこぼんぼ」っていうのは石川の周辺に多いと思います。

P₃₃ やっぱり「かたぐるま」っていうのは、今の首都あたりの東京とか神奈川で使っているから、日本の首都あたりの言葉を標準語にしたんだと思います。

T₁₂ さっきP₂₃で東京の方言って言ってたんだけど、関東地方の方言だったって言っていいかもしれないね。じゃあ、もともとそんな言葉がどうしてみんなのところに広まったの。

P₃₄ テレビとかラジオとか新聞とかを流している中心の場所がだいたい関東地方なので、関東地方の方言が全国に流れたんだと思います。

P₃₅ 私もだいたい同じなんだけど、関東地方と言ったら日本の首都ですね。首都からテレビとかラジオとか新聞とかを出していったと思うので、それで関東地方の方言が他の地方へ伝わり、今の「かたぐるま」のようになったんだと思います。

P₃₆ 私は「かたぐるま」を含め、標準語というのは日本の中心になるところの言葉だと思います。

T₁₃ それでは、ここで今日学習した「かたぐるま」という言葉や、標準語ということについて、整理してノートにまとめてみましょう。

生徒のノートより

①子供などを首にまたがらせて高くさし上げることは「かたぐるま」だと思いこんでいたけれども、時代が古くなっていくといろんな言い方があるということがわかりました。その方言も地方によって全然違うし、その中でも変わっていったけれど、今ではテレビやラジオから伝わってくる「標準語」というのがあたりまえになり、方言があまり使われなくなりました。標準語というのは、もともと関

東地方の言葉で、全国的に通用する言葉を意味します。

②昔は地方ごとの言葉が発達していて、方言が多く使われていた。今はラジオ、テレビ、新聞などの発達によって標準語が広まったので、ぼくたちの「かたぐるま」についての言い方が最も少ない。

7 授業の反省

生徒たちのほとんどが地元金沢の生まれでありながら、金沢弁というものをあまり知らずに成長しているようであり、実際に自分たちの調査した資料から出てきた、祖父母や父母が用いている表現に驚くとともに、より強い関心を示してくれたようである。

年代差や地域差を考えていくときには、それが比較的はっきり表れているものがよいであろうと考え、「かたぐるま」を取り上げた。

こちらから言うまでもなく生徒の意見の中に「方言」や「標準語」という言葉が出てきたが、言葉としては知っていても、どのようなものをそう言うのかということについてはかなりあいまいであった。

こちらで考えていた「共通語」という言葉は混乱をまねくと考え、示さなかったのであるが、標準語、共通語という言葉の概念について、生徒たちにどの程度まで説明すればよいものなのか、迷ったところである。

全体的に、よく意見の言える生徒の発言によって進んでいった授業のような感じがしているが、もっとその他の生徒にもじっくりと考えさせる時間を与えてやる必要があったのではないかと反省している。

ただ、そういった意見を聞きながら、自分たちが普段何げなく用いていた「かたぐるま」という言葉について、一步深く認識してくれたことと思う。

このような方言についての学習を、単元の中でどのように位置づけていくかなど、問題点も多いが、それらについては今後の課題としていきたい。

実践例②（2年の授業）

夷藤 保

1 題材 助動詞（ことばのなかまわけ）

2 目標

- ・助動詞のもつ特質（話し手の立場の直接表現であること、陳述・判断を表現する、活用をもつ）を考えさせる。
- ・それぞれの助動詞を、その内容によって分類（断定、打消、推量、過去、丁寧など）することができるようにする。

3 指導の観点

わたしたちが、「ことば」と言えば、一般に、名詞・動詞・形容詞などのいわゆる自立語がまず頭の中に浮かんでくる。そして、助動詞・助動詞などのいわゆる付属語には、あまり注意をはらおうとしないのが常ではなかっただろうか。これは、文章を読むときであっても、また文章を書く場合においても同様である。

しかし、あまり注目されない、いわゆる付属語のはたらきこそが、日本語を支える重要な意義を持っているのではないだろうか。

いま、付属語のうちの助動詞のもつ特色を、生徒に考えさせる過程で、これまで何げなく使い、軽視しがちであった、助動詞（いわゆる付属語）の重要性を改めて認識させたいと考える。

4 指導計画（3時間扱い）

- ・付属語の特質……………1時間
- ・助動詞のはたらき……………1時間（本時）
- ・まとめ……………1時間

5 本時の学習

(1) 学習のねらい

助動詞が、陳述・判断の表現を直接的に担当するものであることを、具体的に考え、理解させる。

(2) 学習の展開

学 習 活 動	配時	予想される生徒の反応と教師の働きかけ
<p>1 例文をもとにして、文末のいろいろな表現を考える。</p> <p>(例文)</p> <p>(1) バスが来<input type="text"/>。 (る)</p> <p>昨日は (2) 今日はい 雨が降<input type="text"/>。 明日は (る)</p> <p>(3) あれは、鳥<input type="text"/>.</p> <p>2 考えた例文を発表する。</p>	<p>20</p> <p>10</p>	<p>・例文から、どんな文末表現ができるだろうか。</p> <p>・自由にノートに書かせ、発表させる。</p> <p>(例)</p> <p>(1) バスが来ます。 来ない。 来ぬ。 来ません。 来るらしい。来るだろう。来るでしょう。 来るようだ。来よう。 来そうだ。 来た。 来ました。</p> <p>・時制に関する意識をもたせるために、例文に「昨日・今日・明日」のこぼをつけて考えさせてみる。</p> <p>(2) 昨日は雨が降った。 降りました。 降らなかった。 降りませんでした。 降っただろう。 降ったでしょう。 降ったらしい。 降ったようだ。 降ったそうだ。 今日は雨が降ります。 降らない。 降りません。 降らぬ。 降るらしい。 降るようだ。 降るようです。 降るだろう。 明日は雨が降るらしい。 降るらしいです。 降るだろう。 降るでしょう。 降るようだ。 降るまい。 降らないでしょう。 降らぬようだ。 降らぬようです。</p> <p>・この形の例文からは、断定の表現が出にくいので、別の例文を提示する。</p> <p>(3) あれは鳥だ。 鳥です。 鳥でない。 鳥らしい。 鳥のようだ。 鳥だそうだ。 鳥だった。 鳥でした。</p>
<p>3 助動詞の性質について考え、意見を発表する。</p>	<p>15</p>	<p>助動詞は、話す人のどんな気持ちを表現することだろうか。</p>

<p>4 学習のまとめをする。</p>	<p>・(1)及び(2)の学習活動での発表内容を、教師がある程度の分類をしながら板書しておき、生徒がまとまった考え方ができるように配慮しておく。</p> <p>「ない」 } ……打消（否定） 「ぬ」 } 「う」 } ……意志及び推量 「よう」 } 「らしい」 } 「だ」 } ……断定 「た」 } ……過去及び完了 「です」 } ……丁寧 「ます」 }</p> <p>・言葉づかいにこだわることなく、思ったことを自由に発言させたい。</p> <p>・どの助動詞が、どんな陳述・判断の内容をもつかという厳密さを、ここでは要求しない。（このことは次時に行う。）</p> <p>5 学習したことをノートに整理させる。</p>
---------------------	---

6 板書

「助動詞」(ことばのなかまわけ)

(例文)

(1) バスが来<る>。
昨日は

(2) 今日、雨が降<る>。
明日は

(3) あれは、鳥。

[丁寧]

・バスが来<ま>す。
・雨が降<っ>ていま<ま>す。
鳥<で>す。

[打消]

・バスが来<な>い。
・雨が降<ら>ない。
・鳥<で>(は)ない。

[推測]

・バスが来<ら>う(か)。
・雨が降<ら>う。
鳥<だ>らう。

[推定]

・降<ら>ようだ。
鳥<の>ようだ。

[予想]

・降<ら>そうだ。
鳥<だ>そうだ。

[伝聞]

・降<ら>らしい。
鳥<だ>らしい。

[過去]

・バスが来<た>。
・雨が降<っ>た。
鳥<だ>った。

[丁寧]

・来<ま>した。
・降<り>ました。
鳥<で>した。

[打消]

・降<ら>でしよう。

7 学習の記録

T 今日は、付属語の中の「助動詞」について勉強しましょう。

まず、ノートを出して、黒板にかかれた例文の文末の部分にいろいろなことばを入れて、いろんな表現をしてみよう。

(例文(1)について、ノートにメモ。)

T では、発表してみてください。

P バスが来るでしょう。

P バスが来ない。

P バスが来るぞ。

T これはちょっと横においておきますね。

P バスが来た。

P バスが来れない。

T 「バスが来ない」と似ていますね。

P バスが来ました。

(略)

T これくらいにしておきますか。次からは、「バスが来るぞ」、「バスが来れない」とか、「バスが来るだろうか」のような扱いに気を付けて考えてみて下さい。

今度は、……… (例文(2)を提示する。)

(例文(2)について、ノートにメモ。)

T では、発表してください。

P 雨が降るようだ。

P 雨が降るだろう。

P 雨が降った。

(略)

T 頭の中を整理してみようかな。(板書された例文を見直してみる。)

最後に、もう一つだけ例文を出してみます。

(例文(3)について、ノートにメモ。)

T では、発表してください。

P 鳥だ。

P 鳥です。

P 鳥だろう。

P 鳥でした。

P 鳥だった。

P 鳥ではない。

T まだ出ていない表現はないかな。

P 鳥だそうだ。

P 鳥のようだ。

P 鳥らしい。

P 鳥でしょう。

T こうやって、いろいろ例文を出してもらったのだが、そろそろ何か気のつくことが出て来そうですね。

まず、この4つのグループで考えてみてください。

助動詞は、話す人のどんな気持ちや心を伝えることばでしょうか。

それぞれのグループが、だいたいどんな内容を表すか、ということで考えてみてください。

(少し考える時間をとる。)

T では、どうですか。

P 「鳥だ」というのは、「断定」というか、はっきり決めつけていることばだと思います。

P 「来るらしい」、「来るそうだ」というのは、「予想」というか、そういったことを……。

P 「来ない」とか「鳥ではない」というのは、そのことを「否定」していると思います。

P 「来た」とか「降った」というのは、「過去」を表します。

P 「来るらしい」というのは、「推測」というか、「推定・推量」を表わすことばではないかと思うんだけど、……。

T N君は難しい言葉を使っていたね。

P はい。「伝聞」というのではないかと、……。(N君は、この言葉をノートにメモしていたのだが、発言をしばらく待ってもらっていたのであった。)

P 「否定」と言ったところは、「打ち消し」と言ってもよいのでは、……。

T 必ずしも「否定」の意味だけではなく、「打消」の意味もあるということですね。

では、こちらの方はどうですか。(別記しておいた、「ていねい」の意味を表す語句の方を示してみる。)

P 「敬語」というか、「ていねい」な意味で使われていると思います。

T 十分に考える時間をとることができなかったのですが、「助動詞」は、だいたいどんな気持ちや心の内容を表すことばかということが分かってきたように思われます。ノートまとめをする時間がなかったけど、休み時間を利用して、ノート整理をしておいてください。

8 授業の反省

所期の学習目標は、ほぼ達成されたようだが、何だか、ヤマの無い授業だったようでもある。

理由をあげれば、いくつか考えられるだろうが、前半での例文をもとにした学習に時間をかけすぎたために、後半部分での「助動詞」の性質について考える学習が駆け足になってしまったことが、主な原因であろう。

本時のねらいは、後半部での学習、すなわち、「助動詞が、話す人のどんな気持ちを表現するものだろうか」という、助動詞の性質面での特色(陳述・判断の表現を直接的に担当すること)に中心がおかれていることから、ここで十分な時間をとる必要があったわけである。

たとえば、例文を取り扱う際に、まず、小グループなどで話し合わせ、検討させたものを、次に、全体学習の場へ持ってくるような方法を取り入れていたならば、もっと短時間で、しかも密度の濃い学習ができたかも知れない。

幸いに、生徒の方では大きな混乱もなく、助動詞の性質をほぼ適確なことばで表現してくれたので、少しばかり救われた思いである。

とにかく、普段なにげなく使用している「助動詞」を、こうして取り立てて考えてみることによって、助動詞の表現内容が何種類かに分類されて理解できたわけである。この学習で、生徒の助動詞に対する認識も、少なからず深まったようである。

そして、何よりも大切だったことは、これらのがらを、生徒自身が自らの手と頭とを使って成し遂げようと努力したことであろう。

実践例③ 3年の授業

高見よ志子

1 題目 助詞を考える

2 目標 助詞が言葉と言葉の関係を示したりいろいろな意味を付け加えたりして、文の成立に重要な働きをすることを理解させ、助詞の意味・用法についての基本的な法則を考えさせる。

3 指導計画(5時間)

- ① 助詞の働きについて考える。
(格・接続・副・終助詞の4つ分類を中心に)
- ② 格助詞の働き・用法を考える。
- ③ 「が」と「は」の使い分けを考える。
- ④ 接続助詞の働きを考える。
- ⑤ 副助詞・終助詞の働きを考える。

4 指導の観点

文法を知識として理解させるのではなく、言葉をとらえて自ら法則を見つけ出すよるこびを味わわせたい。そのために、次の4点に留意して指導したいと思う。

- ① 文法は、ことばを見つめ、考え、法則を見つける時間であるという方針を明確にする。
- ② 提示する資料を平易なものにする。
- ③ 導入をていねいにし、考える場を作り出して十分に時間を与えてやる。
- ④ よくわかる生徒だけの授業に陥らぬように学習形態のくふうをする。

5 展開

① 助詞の働きについて考える

学 習 の 流 れ		教 師 の 働 き か け と 生 徒 の 反 応
<p>1 本時のめあてを知る。プリント配布。 2 資料プリントへの書き込みをしながら、助詞のはたらきをつかむ。</p> <p>④</p> <p>グランド□□□□帰った。() グランド□□□□帰った。() グランド□□□□帰った。() グランド□□□□整備した。() グランド□□□□遊んだ。() グランド□□□□ぬれている。()</p> <p>③</p> <p>じゅうぶん眠った□□□□, すっきりした。 じゅうぶん眠った□□□□, まだ眠い。 山は高い□□□□, 谷も深い。</p> <p>②</p> <p>☆Aさんは あの人に 話した。 Aさんは あの人にも 話した。() Aさんは あの人にはばかり話した。() Aさんは あの人にまで 話した。() Aさんは あの人にだけ 話した。()</p> <p>①</p> <p>妹よ。 お前はいつも木琴をかかえて () 学校へ通っていたね。() 早く街に赤や青や黄色の () 電燈がつくといいな。()</p>	<p>5 40</p> <p>まとめ</p> <p>③④①のまとめの欄省略</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・プリントの作業を通して助詞の働きを考えよう。 ・④の各文は、文としてはどうだろうか。 ・□□□□の中に助詞がないと、<u>グランド</u>という名詞が宙に浮いてしまう。 ・文の中で<u>グランド</u>がどんな位置を占めるか、わからない。 ・□□□□の中に助詞を補おう。また、<u>グランド</u>の文中の働きがどう変わるかを()内に書きこもう。 ・これらの助詞に共通してわかることをまとめてみよう。→まとめ欄 ・③グループは2つの文から成り立っている文である。前後の関係を考えて□□□□内に助詞を補おう。 (接続詞と同様の働き) ・②グループの各文をも、<u>ばかり</u>、<u>まで</u>、<u>だけに</u>に注目し、☆印の文とどんな<u>なちが</u>いがあるかを比較してみよう。 ・共通して言えることは何かを考えよう。 ・①グループの文で<u>よ</u>、<u>ね</u>、<u>な</u>という助詞があることによって、どんな感じや意味が加わってくるのだろう。 ・共通して言えることは何だろう。
<p>3 ④③④①のまとめから、助詞にはつながりを示すものと意味や気持ちを示すものの二種があることを知る。</p>	<p>5</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・上記のまとめを大切にしながら、助詞は4つに分類されることを知らせる。 語と語のつながりを示す { ④ 格助詞 ③ 接続助詞 話し手の気持ちを示す { ② 副助詞 ① 終助詞 ・4つの名づけ方の理由も知らせる。
<p>4 本時のまとめ(簡単な練習問題)</p>	<p>5</p>	<p>れる。</p>

次に生徒の書き込みのようすをあげておこ
う。()内に書き込んだことをできるだけ
多くの生徒に発表させ、それらを充分きいた
うえて、自分なりのまとめをさせた。

例えば①グループのまとめとしてA B 2人
の生徒の書き込みと比較すると、表現の差こ
そあれ、終助詞の本質をつかんでいると思わ

生 徒 A	生 徒 B
<ul style="list-style-type: none"> ・話し手の心の強調 ・すべて文の終わりにつく 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の意志や感情をはっきり言い述べる働きをする

プリントへの書きこみ

<p>① お前はいつも大事に木琴をかかえて早く街に赤や青や黄色の電燈がつくといいな。</p> <p>（呼びかけ） （やわらかく強調） （子供っぽい感動）</p> <p>終助詞</p> <p>まとめ 話し手の心の強調、全ての文の終わりにつく。</p>	<p>② ☆ Aさんはあの人に話した。 Aさんはあの人にも話した。 Aさんはあの人にばかり話した。 Aさんはあの人にまで話した。 Aさんはあの人にだけ話した。</p> <p>（あの人以外にも話したこと） （とがわかる） （あの人に限定していること） （あの人に限定していること） （あの人に限定していること）</p> <p>副助詞</p> <p>まとめ 話し手の気持ちが加わってくる。</p>	<p>③ 山は高いが谷も深い。</p> <p>（けれども） （けれど） （けれども）</p> <p>接続助詞</p> <p>まとめ 助詞によって文と文のつながりがはっきりする。</p>	<p>④ グランドへ帰った。 グランドから帰った。 グランドに帰った。 グランドを整備した。 グランドで遊んだ。 グランドが主語になる。</p> <p>（帰る方向を表す） （出発点を表す） （帰る方向を表す） （整備した対象を表す） （場所を表す） （グランドが主語になる）</p> <p>格助詞</p> <p>まとめ 助詞によって名詞の文の中の役割がはっきりする。</p>
--	--	--	---

② 格助詞の動き・用法を考える

学 習 の 流 れ	配時	教師の働きかけと予想される生徒の反応
1 格助詞とはどんな助詞か、思い出す。	5	<ul style="list-style-type: none"> 名詞につく。 前時の復習 { 文中で名詞がどの部分とどんなつながりを持つかを示す。 <p>中村くん^① おじさんが^② ぼく^③を 車^④で 家^⑤から 学校^⑥まで 送^⑦ってくれた。</p>
2 例文（板書）を読んで名詞に着目しながら格助詞をぬき出す。		
3 (名詞+格助詞)が文中のどの語とつながりを持つか。それはどんなつながりを示すのだろうか。		<ul style="list-style-type: none"> 本時の学習のねらいを明確にする。
<p>例文の分析をする。</p> <p>{ どの語にかかっているか。 かかっている語の何を示すか。</p>	15	<p>中村くん^① —— おじさん（おじさんを規定する）</p> <p>おじさん^② —— 送^⑦ってくれた（動作者）</p> <p>ぼく^③ —— 送^⑦ってくれた（動作をされる人）</p> <p>車^④ —— 送^⑦ってくれた（動作の手段）</p> <p>家^⑤(^⑥から) —— 送^⑦ってくれた（動作の出発点）</p> <p>学校^⑥(^⑦まで) —— 送^⑦ってくれた（動作の到着点）</p> <p>・単に主語・修飾語という指摘ではなく、文中の意味関係をはっきりさせる。</p>

<p>4 ㊦という格助詞はどんな意味を持っているかを調べる。</p>	<p>日曜日に美術館に行く途中、先生に会った。</p> <p>① 日曜日㊦——行く（動作の行われた時） ② 美術館㊦——行く（動作目標・到着点） ③ 先生㊦——会った（動作の相手・対象）</p>
<p>5 1つの格助詞にもいろいろな意味があることを調べてみよう。</p> <p>昔話「一寸法師」に出てくる格助詞「に」について調べる。</p> <p>（グループ討議）</p> <p>（文の中でつながる語と組み合わせて考える。）</p> <p>6 本時のまとめ。</p>	<p>30</p> <ul style="list-style-type: none"> ・プリント資料配布・音読 ・資料の中の格助詞㊦を全部ぬき出す。 （注意）元気には形容動詞の一部である。 ・グループのようすを見て、アドバイスをする。 ・板書 <p>④（ある）村に 生まれました。 ⑤ おとうたちに 言いました。 ⑥ お腕の舟に 箸のかい。 ⑦（この）おやしきに きーめた。 ⑧（法師を）家来に しました。 ⑨ おまいりに 行きました。</p> <p>分析 ④動作の行われる場所 ⑤動作相手 ⑥対等に並べる ⑦選択の対象または結果 ⑧変化した結果 ⑨動作の目的（～するため）</p>

資料プリント

<p>⑧ おまいりをぶじすませでの帰り道。山道を、くだっていきますと……。</p> <p>⑦ 何年かたったある春の日、法師は春姫様のおともで清水寺へおまりい<small>（動作の目的へ～するため）</small>いきましました。</p> <p>⑥ そのこは、三條大臣のおやしき<small>（一寸法師が入れかわった（変化の入れかわり））</small>でした。</p> <p>⑤ 京の都は、法師がおもつていたよりも、ずっと、ずっと立派でした。法師は都でいちばん立派なおやしきを見つけました。</p> <p>④ 法師は、お腕の舟<small>（並列の関係ならんている）</small>に箸の権<small>（動作者の対象も）</small>で、川をくだっていく日も旅を続けました。あらし<small>（動作者の対象も）</small>もあいました。</p> <p>③ 「それでは、おとう、おかあ、いってきます。」</p> <p>② ある日、法師はおとうたち<small>（動作者の対象（相手））</small>にいいました。「おらあ都へ行ってみたいだ。」おとうとおかあは法師<small>（動作者の対象（相手））</small>の針の刀など、旅じたくをしてくれました。</p> <p>① むかしむかし、ある村<small>（行われる場所）</small>に、小さな小さな男の子がうまれました。とても小さいので、一寸法師となづけられました。</p> <p>そして、元気<small>（元気だ 形容動詞）</small>に育ちました。</p> <p>一寸法師</p> <p>△2時▽ 格助詞「に」についての研究 三B三八 藤永 忍</p>
--

この授業では4・5の過程に、最も意欲が見られた。「一寸法師」は、話も単純なので容易に「に」の分析に取り組めたのだろう。グループで楽しい作業が続いた。

格助詞のすべてにわたって調べる時間的余裕はもちろん無い。しかし、一つの学習が他

の学習の方法につながったり、他への目を開かせる要素を持つなら、それは「考える学習」という目標に近づいたと言えよう。

③ 「が」と「は」の使い分け

学 習 の 流 れ	配時	教師の働きかけと予想される生徒の反応
1 「桃太郎」の冒頭を言ってみる。 2 教師の語る「桃太郎」を聞き、相違点に気づく。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> 昔むかし あるところに おじいさんと おばあさんは ありました。 おじいさんが 山へ 柴刈りに おばあさんが 川へ 洗たくに 行きました。 おばあさんは 川で 洗たくを していると、大きな 桃は 川上から どん ぶらこ どんぶらこと 流れてきました。 </div>	5	<ul style="list-style-type: none"> • 2人に言わせてみる。誰もが知っている昔ばなしなので、ほとんど一致する。 • ㉙と㉚をわざわざ入れ替えて聞かせる。 • どこがおかしいのだろう。
(入れ替えると変に感じる助詞がある) 3 本時の学習の目あてをつかむ。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> 「～は」と「～が」の使い分け </div>		<ul style="list-style-type: none"> • 主語を示す助詞㉙と㉚には使い分けがあるらしい。
4 どう使い分けしているかを例文で考える。 <div style="margin-left: 20px;"> a 月が 明るい。 月は 明るい。 b 鳥が 飛ぶ。 鳥は 飛ぶ。 c 私が山田です。 私は山田です。 </div>	30	(板書) ・今日は主語を示す㉙と㉚がどう使い分けられているか勉強しましょう。 <ul style="list-style-type: none"> • 考えやすいように三組の短文を板書する。 • グループ討議による検討。 • どんな場面で使い分けしているかを考えるとよい。 • 各グループを巡視しながら、アドバイス。 <div style="margin-left: 20px;"> ㉙ 実際に見た時、その場。 ㉚ 見ていなくても言える。 } a・bより 他と比較している。 とりあげてその性格をいう。 </div> <ul style="list-style-type: none"> ㉙ 山田が前にわかっている。私が強調される。 ㉚ 山田が強調される。
5 グループの分析を発表する。		<ul style="list-style-type: none"> • 要点を板書する。
6 分析を見渡して、総合的にわかったことは何かノートにまとめる。	5	<ul style="list-style-type: none"> ㉙…………そのもの一つの性質や関係 個別判断の時 ㉚…………その事物すべてに共通する性質や関係を示す時 (一般性) 対比して一方に限定した主語を述べる時。
7 「桃太郎」の冒頭が、6のまとめにあてはまるか検討してみる。	10	<ul style="list-style-type: none"> • 6で生徒がノートしている間に「桃太郎」の冒頭を板書する。 • 5・6の分析が相当することを確認させる。

導入として誰もが知っている昔話を取りあげた。何が始まるのか、わからず、とまどいながらも 2 人の生徒が、「昔むかし、あるところに」と声をあげて語った。「……どんぶらこと流れてきました。」というところでストップさせ、2 人の覚えていた冒頭がほとんど同じであることを確認した上で、指導案の 2 のように、わざと㉔と㉕を入れかえた語りを、ゆっくり言ってきた。ほとんど誰もがすぐに違いに気づいたので、㉔と㉕がどう使い分けられているかという問題提起をした。

生徒は、さあ考える時間がきたのだなという表情で次の働きかけを待つ。私は、黒板に三組の例文を書きあげた。

グループを作らせ、気楽に話し合わせてみると、身近な場面をとりあげながら、かなりいい分析をしている。中でも学級全体にきかせたいと思うものをチェックして発表させた。

以下はそのようすである。

a 月が明るい←→月は明るい

P ㉔の方は、今現在のようすで、見ている時に言う表現であるのに対して、㉕の方は、それ（月）そのものの性質を表わします。

P ㉔が主観的な言い方で、㉕は客観的な言い方だと思います。

P 明るいのは何ですかという問いに対して、月が明るい、と答えるけれど、月は明るいとは言わない。

P ㉕の方は、月というものはどうかを説明しているのです。明るいとか明るくないとか。だから、常識となっていることを言う表現だと思います。

(Tは、黒板に発表の要点を書き上げていくだけである。Pも各グループの分析結果を興味深げに、きいている。)

b 鳥が飛ぶ←→鳥は飛ぶ

P ㉔の場面を考えると、窓の外を見ていて、あっ、いま鳥が飛ぶということを伝えている。㉕の方は、鳥の性質として、飛ぶという

部分が重要になります。

(以下は先の例文とほぼ同様の分析だったので簡単に流す。Pの方もグループ学習の際そのことに気づいていた。)

c 私が山田です←→私は山田です

P ㉔の方は山田くんについての説明で、㉕の方は私についての説明です。

(グループで話し合われたものを簡潔にまとめて発表しているの、他のグループはげんな顔つきである。さらにくわしく場面を言わせてみた。)

P 例えば、歯医者さんなどで「山田さーん。」とか呼ばれた時、山田さんという人がいることがわかっているのです。だから、山田はだれかという「私です」と強調することになるのです。

P ㉕の方は、あなたは誰?ときかれた時に、「私は山田です」と言うのです。

P 君は鈴木くんか?ときかれた時も「私は山田です」と言います。

T 重点がおかれるのはどっち?

P ㉔の場合 私が 山田です。

㉕の場合 私は 山田です。

T 重点のおかれる部分という見方はaやbの例にもあてはまるのだろうか。

P 月というものは、ということ、性質として明るい、とか明るくないかを説明しているから、述語に重点がおかれる。

P 月に気づいて 月がというから月の方に重点をおく時は㉕です。

T それでは今までのところでわかったことをノートにまとめておきなさい。

P (ノートにまとめる)

T (まとめている間に板書)

昔むかし、おじいさんと おばあさんが①ありました。おじいさんは②山へ 柴刈りにおばあさんは③川へ 洗たくに 行きました。おばあさんが④洗たくを していると、大きな桃が⑤どんぶらこ どんぶらこと 流れてきました。

T さあ、この授業の一番初めにお話しした桃太郎に出てくる㉔と㉕です。a・b・cの例文で考えたことが、ここでも言えますか。

P ①は 昔むかし 誰がいたかという、おじいさんとおばあさんです。だから、誰かに重点がおかれるから㉔という主語になります。②は、そのおじいさんがどうしたかという説明になるので㉕になるのです。

T そうね。お話に初めて出てくる主語に重点がおかれているのです。そして、おじいさんはもうわかっているのだから、こんどはどうしたかを説明するわけで㉕を使い、ドウスルの部分に重点がおかれる。③のおばあさんも同様です。

④の㉔は今日の学習とは性質が異なるのでおいて、⑤はどうですか。

P 別の新しい主語が出てくるので、主語が強調されて㉔となっています。

以上が1時間の中で学習された㉔と㉕の役割りである。生徒は提示された短文から、これまで意識しなかった㉔と㉕のきまりを分析したのである。この点については、大野晋氏が、「既知のハ」「未知のガ」という分析をしておられるが、生徒どうしの話し合いの中から、ことばは幼いながら、ちゃんと出てきたのである。単純な例から、文法事項に気づいていくおもしろさは、グループ討議の熱心さの中によく感じられた。

なお、桃太郎の「おばあさんが洗たくをしているとの ㉔(節の中の主語)は、次の時間に簡単にふれ、あわせて「国語が好きだ」や「野球ができる」など、対象を表わす㉔についても指摘しておいた。

次に、これらをめぐる生徒の反応を感想文の中からひろってみよう。

A ぼくは今まで㉔と㉕をなにげなく使ってき

たが、国語の時間にこんな勉強をしてはじめて大きなちがいがあることに気付きました。まず㉔の場合は主語に重点がおかれる時に使われ、初めて出てくる人物や物などのときに使われています。

その次に㉕は述語に重点がおかれていることがわかりました。また、2回目に出てくる人物や物の時に使われていることがわかりました。

今までなにげなく使っていた日本語もちゃんとした規則があるということがわかり、とても感動しました。

B もしだれかに、どんな時が㉔で、どんな時が㉕か? ときかされると、すぐには答えることができませんでした。しかし不思議なことに、授業中、桃太郎の話をした時、きちんと使い分けてありました。この話に限らず、使い分けているのです。いちいちどこに重点を置かなくて考えていないのに……。これは日常の習慣というものでしょうが、使い分けの授業が進むにつれて、私は頭の中で、何度もうなづきました。そして㉔と㉕の使い分けだけでなく、他の日常使っている言葉のかくれた使い分けをもっともっと見つけてみたくなりました。

AやBに限らず、ほとんどの生徒が日頃意識していないことばの中に法則性があることを発見して、新鮮な感動を覚えている。

㉔と㉕の問題を単純に主語・述語の二文節から成る例文にしぼりこんで考えさせた授業であったが、未知のガ・既知のハというとらえ方や、題目を示すハの性格も、この学習からいくらかでも発展的に思考できるであろう。

- | | |
|--------|------|
| ④ 接続動詞 | } 省略 |
| ⑤ 副助詞 | |